

超音波画像観察装置（エコー観察器）を用いて疲労骨折の早期発見 に有効であった一症例

神戸西支部 和辻慎吾

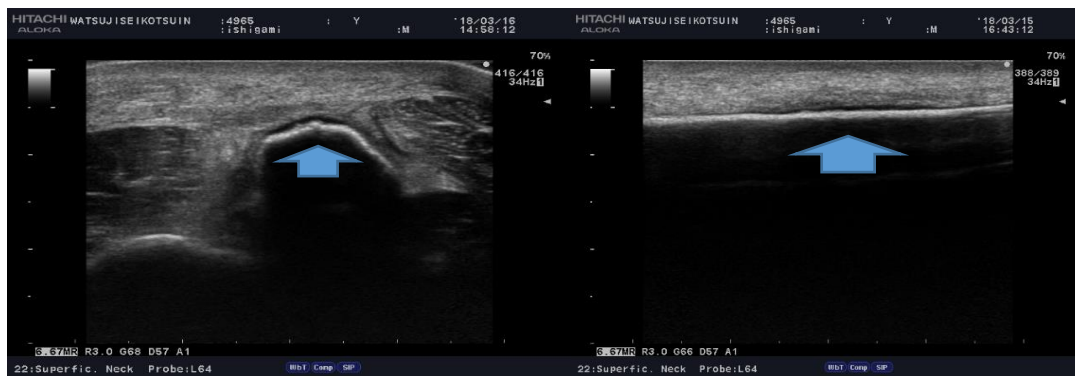
【はじめに】

当院では陸上競技の選手が多く来院し、過労性骨膜炎（シンスプリント）は高頻度で遭遇する。更に一連のものとして疲労骨折まで進んでしまうケースがあり、身体所見としては他覚所見が乏しく鑑別に苦慮する。今回、エコー観察器により疲労骨折に特徴的な骨皮質に肥厚（仮骨形成）が見られる一症例が得られたので報告する。

【症例】

患者、男子 17 歳、陸上競技部・短距離 当院には平成 30 年 3 月 15 日初検
H30 年 3 月上旬から左腓骨外果 5~6 cm 近位部(骨エッジ)に限局性圧痛、歩行時に強い痛みが急に出現。Hopping test(+) fulcrum test(-)軸圧痛(-)。H30 年 1 月にも類似した痛みの右腓骨疲労骨折の既往歴有り。超音波観察器で患部を描出してみると骨膜に肥厚を認める。

【画像所見】



短軸像⇒腓骨に不整像有り

長軸像⇒骨膜の肥厚像有り※この様な

【経過】

骨膜肥厚はシンスプリントによく見られる。

初検から 2 週間後、3 月 28 日近医にて X 線検査受診し疲労骨折と診断される。医師の助言で仮骨の骨硬化が旺盛で運動負荷を徐々に増加。4 月 7 日には競技会に出場した。

【施術内容】…3 月中は週 3 回、4 月中は週 1 回の施術頻度⇒施術合計 11 日

◎LIPUS（伊藤超短波 UST-770）

骨の癒合期間を短縮する低出力パルス超音波治療器（時間 15 分、周波数 1.5MHz、出力 60 mW/cm）

◎MT-MPS＝筋筋膜性腰痛症に対する治療手技

腓骨筋やヒラメ筋などの下肢筋や軟部組織の筋緊張を緩和させる治療手技を行い既存の栄養血管の循環動態を改善し、血管新生反応（VEGF）を促進させる。

◎固定は骨皮質の連続性が有り、骨端線近くである事と腓骨の荷重応力は少ないと考えられ low Risk 群に入るため必要ないと考えた。

【結語】

今回、初めてエコーにおける疲労骨折の経過観察が出来、教訓的な経験が出来た。患者さんの医科への検査が遅れ X 線とエコーの骨皮質の分解能の比較が出来なくて残念であった。

エコー画像で見える骨の腫れ＝疲労骨折とは限らないので問診や徒手検査による身体所見に重きをおきつつ、疑わしいものは画像観察で早期に発見し、シンスプリントや他の骨疾患（骨肉腫・骨軟骨腫等）がある事を念頭に鑑別、除外していきたい。

損傷の程度の把握や復帰の目安のためにこれからも超短波観察器を読影出来る様に精進していきたい。くれぐれも画像の深読みには注意したい。

参考文献

スポーツメディスン NO.158 「疲労骨折の早期発見」 P9～P14